

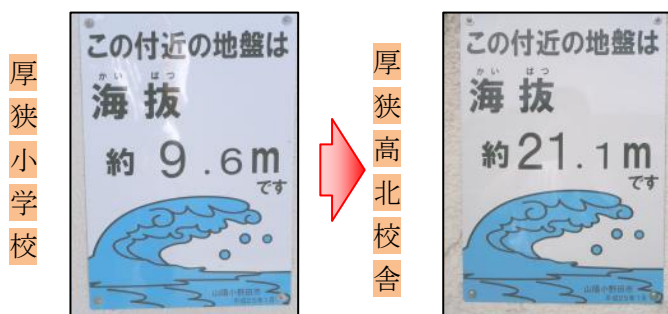
活用事例	3 授業中に地震・津波が発生した場合の二次避難場所までの避難訓練 【特色】小学校から高等学校への二次避難、緊急地震速報の活用		
学校名	山陽小野田市立厚狭小学校		
日時	平成25年2月20日(水) 3校時		
場所	運動場及び厚狭高校北校舎の運動場	参加者	児童・教職員

## 1 訓練のねらい

- (1) 地震発生時の対応や避難方法を身に付けさせる。
- (2) 防災に関する意識を高め、人命尊重の大切さを理解させる。
- (3) 避難訓練を通して、指示に従い規律正しく迅速に行動する態度を育てる。

## 2 訓練の概要

- (1) 子どもを取り巻く環境の確認
  - ア 厚狭小学校の位置
    - ・ 海拔は、約9.6mである。
    - ・ 市防災マップでの状況を確認する。
  - イ 子どもの知識と行動力の定着
    - ・ 将来、地震に遭遇した際の対応力を身に付ける。
    - ↓
    - ・ 津波を警戒し高い場所へ移動する。
    - ・ 厚狭小学校からより海拔の高い厚狭高校北校舎の運動場へ移動する。  
(厚狭高校北校舎海拔 約21.1m)



- (2) 実際の訓練の概要
  - ア 緊急地震速報のアナウンスを流す。
    - ・ 緊急地震速報行動訓練用キットの音声を流す。(気象庁)

「緊急地震速報です。強い揺れに警戒してください。緊急地震速報です。強い揺れに警戒してください。」

- ・ 地震の効果音を流す。(キット音声)

- イ 保身行動
  - ・ 地震の効果音を確認し、「机の下にもぐれ！」と保身指示を各授業者が行う。



- ・ 各授業者は、同時に出口を確保する。
- ・ 全校放送をする。

「訓練放送。訓練放送。ただ今地震が発生しました。そのまま机の下で待機。次の指示を待ってください。」

- ・ 情報を収集する。  
教頭及び職員室に待機していた教職員により、校舎の被害状況(目視)を確認する。

- ウ 安全な場所への避難行動(一次避難)
  - ・ 全校放送をする。

「火災の恐れはありません。先生の指示を聞いて、北駐車場に避難してください。」

- ※ 避難場所は、状況に応じて設定。未耐震化の渡り廊下は、倒壊する恐れがあるため、付近を通行しない。

- ・ 避難時の合言葉に留意し避難する。

### 合言葉

お…おさない。  
は…走らない。  
し…しゃべらない。  
も…もどらない。

- ・ 点呼(安全確認)をする。  
担任→学年主任→教頭→校長
- ・ 情報を収集する。  
教頭及び職員室に待機した教職員より、地震情報(ネット、テレビ等)を収集する。

### (3) 全校避難行動

- ※ 今回は、情報収集により、沿岸部に大津波警報が発令されたことを想定  
(二次避難=厚狭高校北校舎の運動場)
- ※ 距離 約650m
  - ・ 落下物や倒壊物に気を付け、各学級1年生から2列で厚狭高校へ向かう。



ブロック塀など倒壊物に注意



約15分で、全児童の移動完了

- ・ 点呼(安全確認)をする。  
担任 → 学年主任 → 教頭 → 校長
- ・ 校長先生のお話

## 3 訓練の成果と課題

### 【成果】

- ◇ 地震が発生した後、津波が来るかもしれないことを想定し、少しでも高い場所へ避難し、自分の命は自分で守る意識と行動について理解することができた。  
また、保護者に対しても、いざという場合の二次避難場所や、子どもの経験談を聞くことで改めて危機対応意識の高揚につながったのではと考える。  
さらに、教職員も「もしも」の際に、どのように児童を安全に避難場所へ誘導できるか再確認することができ、意識の高揚につながった。
- ◇ 学校体制としても、避難場所での保護者の引き渡し方法など共通理解を図ることができた。



### 【課題】

- ◆ 地震や津波への対応や災害に対する危機意識が十分でないことを、課題としてとらえている。  
訓練は毎年実施しているが、実際に地震を経験したことのない(震度3以上の経験がない)児童がほとんどであり、地震の恐ろしさについて実感が薄い。また、本校校舎の建つ地盤の海拔は約10mであり、津波に対して十分回避できる海拔とは言い難い。しかし、海に面していないことや周りを山に囲まれているため、津波による被害の想定意識も高いとは言えない。  
これらの要因により、訓練でしっかりと意識させていくことが必要であると考えますが、十分な時間がとれていない。今後、学級活動等の時間も見直し、各学年に応じた指導計画を考えていくとともに、「学校危機対応演習資料」や防災教育テキスト「自然災害から自分の命を守るために」を活用した職員研修及び児童への指導を通して、より災害への危機意識を高め、いざという場合に適切な判断と行動ができる児童の育成に努めていきたい。